『初心假名遣』の四つ仮名

狩野　理津子

上方町人文化の華開いた元禄時代、多くの一般庶民が文化を享受していた。書記生活の面でもそれは例外ではなかった。識字への意識も当然高まっていたと考えられる。そのためであろうか、仮名遣書もこの時期に集中して多数執筆・刊行されている。この『初心假名遣』は、元禄四年〈一六九一〉に京都で出版された。

江戸時代初期に混乱から混同への変化を遂げた代表的な音韻現象として、四つ仮名とオ段長音の開合が挙げられる。元禄期には四つ仮名の専門書である『蜆縮涼鼓集』（元禄八年〈一六九五〉）も出版されている。そこで、本論では『初心假名遣』で取り上げられた現象のうち、四つ仮名関係を検討対象の中心に据えて、この書で四つ仮名がどのように取り扱われているかを考えてみたい。

四つ仮名に関する記述を持つ仮名遣書の中で最も古いものは、『新撰仮名文字遣』（成立は永禄九年〈一五六六〉頃）である。これは仮名遣書でありながら、四つ仮名を「どう発音仕分けるか」に重きが置かれているものである。また、ロドリゲス日本大（小）文典などのキリシタンのローマ字資料でも四つ仮名の発音に関しての記述がある。一六～七世紀の資料を通して、四つ仮名は「書き分けるもの」よりも、「発音仕分けるもの」であったという認識がされていたのである。それに対して、表記における混乱例はかなり古くから見ることができるが、混乱例については専門書の記述に譲り、ここでは繰り返さない。

『初心假名遣』では、「傍ニ丸ヲ付ルハ誤ノ字也」というように、編者が「誤っている」と判断した仮名の右傍に丸印をつけているが、実際は誤っていない正しい表記であるものを、わざわざ誤った表記へと訂正してしまっている語彙も数多く見受けられる。四つ仮名についてもそれは例外ではない。この書で

取り上げた四つ仮名関係の一二七語（後述）の中だけでも、時代的に前後する他の辞書類や仮名遣書、俳諧付合書などの表記と比較すると、『初心假名遣』独自の誤用例が一四語（後掲図表の★印の語）検出される。本論ではそれらの語彙に注目し、どのような理由で『初心假名遣』の編者が四つ仮名の使い分けを誤ってしまったのか、その要因に何らかの共通した性格を求めるべく、位相面からの切り口をもって、考察を行なった。

四つ仮名が二つ仮名化して音韻的区別を失った時期に、それを書き分けるということは、どのような意義を持っていたのであろうか。笑話や俳諧回文など「庶民の文化」を通して、その頃の一般大衆が持っていた四つ仮名に関する意識を考えてみたい。

仮名遣書における「四つ仮名」

『初心假名遣』では、多くの現象が仮名づかいの対象とされているにも関わらず、本論で「四つ仮名」を考察の対象としたのは、現象別の分類で最も多数を占めるハ行転呼音関連は、すでに十世紀頃に成立した音韻現象であること、次いで多数を占めるア行ワ行の交替関連も中世初期に生じた現象であって、『初心假名遣』の成立した元禄時代では、イ―ヰ・エ―ヱ・オ―ヲは同じ発音（節用集でも分類上区別がなく、四四部となっている）であって、結果としてどの仮名を使って表記するかという「仮名づかい」としての現象でしかなかったのに対し、「四つ仮名」はオ段の開合と同じく、江戸時代初期に混乱から混同への変化を遂げた、言わば「生々しい」現象であるためである。

仮名遣書で、最初に四つ仮名に触れたのは先述のように『新撰仮名文字遣』であった。その序文には四つ仮名について「…すヲ以テつニ書シ、しヲ以テちニ書シ…」のように記されている。『新撰仮名文字遣』と同様に四つ仮名の発音上の区別を具体的に示したものとして契沖の『和字正濫鈔』（巻五・中下に濁る「す」の項目）があるが、そこには次のように「鼻音」の有無ということが強調されている。

（四つ仮名は）都方の人の常にいふは、「ち」の濁りは「じ」となり、「つ」は「ず」となる。田舎の人のいふは、「じ」は「ぢ」となり「ず」は「づ」となる。「ぢ」と「づ」はあたりて鼻に入るやうにいはざればかなはず…。

契沖は、四つ仮名の「発音上の区別」は「あたりて鼻に入るやうにいふ」ことが大切であると主張しているのである。この

「あたりて鼻に入る」というのは、広義の鼻音のことと考えられる。

鼻音については『蜆縮涼鼓集』も

（「ぢ・づ」の発音は）其気息（きそく）の始を鼻へ洩（もら）すばかりにて、歯と舌とに替る事はなき也（上・九オ）。

と指摘している。

そのほか、有賀長伯の『以敬斎口語聞書』の「すつしちの仮名つかひの事」の項にも次の記載がある。

「すつしち」の仮名を濁るに、「つ」と「ち」とハつめて少し鼻へかけて濁る。「し」と「す」とハつめす鼻へかけすして濁る也。

「ジ・ズ」と「ヂ・ヅ」との音の区別を、このように鼻音の有無で説明するのは、仮名遣書に限ることではない。例えば、伊勢物語の読み癖資料である『東洋文庫本伊勢物語読曲清濁』細川幽斎（寛永三年〈一六二六〉）にも、

忍ぶも地（△鼻ニ入テヨム）ずり

二條（△鼻ニ入）

のように、「ヂ・ヅ」の仮名の右肩に「△」の記号をつけて「鼻ニ入ル」という注記の加えられていることが報告されている。[註①]

このように、「ヂ・ヅ」の発音についての詳しい説明があるということは、そのような説明をしなければ、四つ仮名は、「ヂ＝ジ」「ヅ＝ズ」と二つ仮名化してしまい、その区別ができなくなっていたためではないかと考えられる。

『初心假名遣』の四つ仮名の分類

『初心假名遣』の四つ仮名関連の一二七件の語彙を、和語と漢語とに分類して挙げる。ここで和語と漢語とに分類したのは、漢語は一部の語を除き漢字表記が基本であって、仮名で表記することは殆どないために、同一条件の比較では正確な分析ができないと考えたからである。以下、①「じ」を「ぢ」に誤ったとする類、②「ぢ」を「じ」に誤ったとする類、③「ず」を「づ」に誤ったとする類、④「づ」を「ず」に誤ったとする類、の四種の分類に従って全用例を挙げる。但し「〇」印の箇所は本文（元禄四年版・架蔵本）のままとする。

◎和語　全八一語

①「じ」を「ぢ」に誤ったとする類　…　九語

「にぢ　にじ　虹」「はぢかみ　はしかミ　生姜」「ひともぢ。

ひともし　葱」「ひぢき　ひじき　鹿角菜」「ふぢだいこ　ふじだいこ　冨士太鼓」「ひつぢ　ひつじ　羊」「ふぢ屋　ふじ屋　冨士屋」「いのちみぢかし　命みじかし　夭　短命」「はぢく　ゆひにてはぢく也　はじく　弾」

②「ぢ」を「じ」に誤ったとする類　…　二九語

「すじかいみち　すぢかい道　違道」「ふじいろ　ふぢいろ　藤色」「おゝおうじ　おほおほぢ　族父和名」「おうじ　おほぢ　祖父」「をやじ　おやぢ　親父」「すじ　すぢ　筋」「ひじ　ひぢ　臂」「ふじむら　ふぢむら　藤村」「ふじいてら　ふぢゐてら　葛井寺」「ことじ　ことぢ　柱　徽同」「わらじ　わらんぢ　草鞋」「もじ　もぢ　縑」「あじさへ　あぢさい　紫陽花和名」「かじめ　かちめ　滑布」「ふじと　ふぢと　藤戸」「うし　うぢ　蛆」「けじ〳〵　げぢ〳〵　蚰蜒」「くじら　くぢら　鯨雄　鯢雌」「あじ　あぢ　鯵」「ふじ屋　ふぢ屋　藤屋」「もしあり　もぢあり　縑在」「いそじ　いそぢ　五十」「はじ　はぢ　耻」「とじて　戸をふさぐ也　とぢて　閉」「くじとる　くぢ　鬮」「けじめ　けぢめ　結目　驗同」「あじわい　あぢハひ　味　味ー飯」「すじかう　すぢかふ　折違　直違」「すしかい　すぢかひ　折違　直違」

③「ず」を「づ」に誤ったとする類　…　六語

「ミくづ　ミくず　水屑　海屑」「ミづがき　ミずかき　瑞籬」「かづま　かずま　数馬」「うらはづ　うらはず　末弭」「くづ　くず　葛」「もづ　もず　鵙」

④「づ」を「ず」に誤ったとする類　…　三七語

「いかずち　いかづち　雷」「いずみ　いづミ　和泉」「いずも　いづも　出雲」「いず　いづ　伊豆」「かずさ　かつさ　上総」「いわしミず　いハしミづ　岩清水」「うずまさ　うづまさ　太秦」「きずき　きづき　杵築」「しずのを　しづのお　賤男」「なまず　なまづ　癜」「ずんぎり　づんぎり　筒切」「くず　物ノ餘リ　くづ　屑」「しとうす　したうづ　襪子」「はうずき　ほうづき　酸漿」「あずき　あづき　赤小豆」「ひずる　ひづり　薖蔞」「ていかかすら　ていかかづら　絡石」「なずな　なづな　薺」「もずくもぞこ　もづく　海蘊」「しずゑ　しづえ　下杖」「ずわへ　づはえ　楛」「うずら　うづら　鶉」「いろくず　いろくづ　鱗うろくつトモうろこトモ」「かずのこ　かつのこ　鰊鯑」「なまず　なまづ　鯰」「はずる　はづるはっかし　耻」「とずるとつる　緘　綴帳衣」「ぬかずく　ぬかづく　叩首神ヲ礼スル也」「わすか　わつか　纔」「かしずく　かしづく　冊」「たずさゑたづさへ　携」「なずむ　なづむ　泥」「くずおる、老　くづをる　窮　頽堕」「まずし　まづし　貧」「けずる　けづる　削

梳髪鑵地」「さゑずる　さへつる　囀」「しずむしすめ　しづむしづめ　沈　湛」

次に、漢語の場合も和語と同じ方法で四種に分類する。

◎漢語　全四六語

①「じ」を「ぢ」に誤ったとする類　…　一三語

「てんぢやう　てんじやう　天井」「ぢやうろう　じやうらう　上臈」「ぢじう　じゞう　侍従」「ぢやうふくじ　じやうふくし　浄福寺」「ぢろうさへもん　じらうさゑもん　次郎左衛門」「ぢやう　じやう　常」「ぢん　じん　儘」「ぢ　じ　治　慈同」「とうちうちよ　とうちうじよ　董仲舒漢孝景帝博士」「りやうぢれうじ　療治」「ぢんどう　じどう　磁頭矢」「へいち　へいじ　瓶子」「こんぢちやう　こんじてう　金翅鳥」

②「ぢ」を「じ」に誤ったとする類　…　二三語

「じんぢやう　ぢんでう　晨朝」「ろじ　ろぢ　盧次」「たじまたぢま　但馬」「てんじく　てんぢく　天竺」「うじ　うぢ　宇治」「じよろう　ぢよらう　女郎」「かじ　かぢ　鍛冶」「じぶぢぶ　治部」「かじた　かぢた　梶田」「せうじじ　しやうぢじ　勝持寺」「さうじじ　そうぢじ　総持寺」「じん　ぢん　甚」「じやう　ぢやう　丈」「じよ　ぢよ　恕」「じやうぎ　ぢやうぎ　定規」「まんじう　まんちう　饅頭」「ひめじや　ひめぢや　姫路屋」「とんじやく　とんぢやく　貪着」「じかい　ぢかい出家　持戒」「じうおん恩也　ぢうをん　重恩」「じぜう　ぢぢやう　治定」「こうじき　かうぢき　高直」「むじん　むぢん　無尽」

③「ず」を「づ」に誤ったとする類

用例なし

④「づ」を「ず」に誤ったとする類　…　一〇語

「ごずてんおう　ごづてんわう　牛頭天王」「さうず　そうづ　僧都」「ずしやう　づしよ　圖書」「えしんのそうず　ゑしんのそうづ　恵心僧都」「ずつう　づつう　頭痛」「ずたけ　づだけ　律管」「そくず　そくづ　蒴藋」「うず　うづ　烏頭」「はず　はづ　巴豆」「きんまうずい　きんもうづゐ　訓蒙圖彙」

以上が四つ仮名関連の全語彙の分類である。これによると「じ→ぢ」は和語で九語、漢語で二三語の合計二二語。「ず→づ」は和語で六語、漢語はゼロ。一方「ぢ→じ」は和語で二九語、漢語で二三語の合計五二語。「づ→ず」は和語で三七語、漢語で一〇語の合計四七語となる。和語と漢語をあわせてみると「じ・ず→ぢ・づ」が二八語に対し、その逆の「ぢ・づ→じ・

ず」が三倍強の九九語であって、後者の方が圧倒的に多いことがわかる。巨視的にみると「ぢ・づ」の発音が、「じ・ず」に合一化した過程が表記にそのまま反映しているといえるのである。

他文献（仮名遣書・辞書）の収載語との比較

ここでは『初心假名遣』と成立期が時代的に近い仮名遣書として、『新撰仮名文字遣』永禄九年〈一五六六〉成立・『假名字例』延宝六年〈一六七八〉刊・『和字正濫鈔』元禄六年〈一六九三〉刊・『蜆縮涼鼓集』元禄八年〈一六九五〉刊・『倭字古今通例全書』元禄九年〈一六九六〉刊、及び辞書『日葡辞書』慶長八年〈一六〇三〉刊・『増補下学集』寛文九年〈一六六九〉刊・『合類節用集』延宝八年〈一六八〇〉刊・『書言字考節用集』享保二年〈一七一七〉刊、の九種の文献に収められている四つ仮名関係の語彙と『初心假名遣』に挙げてある語彙との比較を行なった。その結果、次の一二語の表記が右の九種の文献と共通することがわかった。

「いかずち　いかづち　雷」「にぢ　にじ　虹」「ひじ　ひぢ　臂」「くず　くづ　屑」「もじ　もぢ　縑」「あずき　あづき　赤小豆」「うずら　うづら　鶉」「もず　もず　鵙」「わすか　わつか　纔」「たずさゑ　たづさへ　携」「くずおる、老　くづをる　窮　頽堕」「けずる　けづる　削」

（表記は『初心假名遣』に従う）

以上の一二語は、右の九種の文献にも「四つ仮名」を誤ることなく「正しい仮名づかい」で挙げてある。

ところで、『初心假名遣』に挙げられている四つ仮名関係の語彙の表記と、右に挙げた九種の文献との間には、仮名づかいの異なるものがいくつかある。そこで、『初心假名遣』の表記を中心に据えて、右の九書の仮名表記の相違を簡潔にまとめたものが、次の［図表］である。図表での「★」印は、歴史的仮名づかいに反するものを、「○」印は合致するものを、また、新撰＝新撰仮名文字遣、字例＝假名字例、正濫＝和字正濫鈔、蜆縮＝蜆縮涼鼓集、通例＝倭字古今通例全書、日葡＝日葡辞書、増補＝増補下学集、合類＝合類節用集、書言＝書言字考節用集の略称である。

初心仮名遣			仮名遣書					辞書			
			新撰	字例	正濫	蜆縮	通例	日葡	増補	合類	書言
○	あぢ	鯵							じ		
○	いそち	五十		じ			じ				じ
★	うぢ	蛆		じ	し		じ	じ	じ		じ
○	うらはず	末弭								づ	づ
★	かつのこ	鰊鯑				ず		ず			
★	くぢ	圖		じ		じ	じ	じ	じ	じ	じ
○	くぢら	鯨		じ			じ	じ		じ	じ
○	げぢげぢ	蚰蜒			じ		じ	じ		じ	じ
○	したうづ	襪子		ず			ず				
○	すぢ	筋									じ
○	すちかふ	折違				じ					
★	たぢま	但馬									じ
★	づはえ	楮	ず	づず	す	ず		ず			ず
○	ぬかづく	叩首							ず		
○	ふち	藤								じ	
★	みくず	水屑	つ		つ	つ		づ		づ	づ
○	みじかし	短					ぢじ		ち		
★	みずかき	瑞籬	つ		つ	づ	づ	づ		づ	づ
○	もづく	海蘊		ず			ず				
○	かうぢき	高直	し								
★	じ	治	ち			ぢ		ぢ	ち	ぢ	
★	ぢよ	恕				じ					
○	ぢよらう	女郎							じ	じ	じ
★	ぢん	甚				じ		じ			じぢ
★	ぢんでう	晨朝				じ		じ	じ	じ	じじ
○	づだけ	律管									ずじ
○	とんぢやく	貪着									じじ
★	むぢん	無尽				じ		じ	し	じ	じじ
★	れうじ	療治					ぢ	ぢ		ぢ	ぢぢ
★	ろぢ	盧次				じ				じ(路次)	じ

て検証してみても、そこに語彙面からの共通性を見つけることはできないのである。

そこで、和語の五語について、少し詳しく考察を加える。

語の位相を考える際、参考となるものに『日葡辞書』がある。『日葡辞書』には語の説明の後に、P（詩歌語）・S（文書語）・Bup（仏法語）・B（卑語）・方言（X＝下の語（九州方言）、Cami＝上方語）・婦人語・幼児語などと注記されている語がある。[註②] そこで、この五語について『日葡辞書（引用は『邦訳日葡辞書』による）』で確認すると、「みくず（水屑）」について、次のような説明を見出すことができる。

ミクヅ（水屑）　川や池沼の底に生ずる草、ソコノミクヅトナル、溺れて死ぬ。詩歌語。

『日葡辞書』で詩歌語とするものは、必ずしも和歌に限らず、源氏物語や伊勢物語などの散文や、漢詩・和漢聯句などをも含む広範囲の出典に基づくものであるが、この「水屑」に関しては初出が拾遺集（巻十一・恋・六七一）の「かきやらばにごりこそせめ浅き瀬のみくづはたれかすませてもみむ」であって、明らかに歌語であることがわかる。また、「づはえ（楛）」については、そのままの形ではないが、[註③]

ズワイ（楚）あるいくつかの地方において、樹木の細枝、

『初心假名遣』の四つ仮名の誤り

［図表］で★印をつけた語（『初心假名遣』だけが仮名づかいを間違えた語）は、「うぢ（蛆）」「くぢ（鬮）」「づはえ（楛）」「みくず（水屑）」「みずがき（瑞籬）」「じ（治）」「ぢんでう（晨朝）」「むぢん（無尽）」「れうじ（療治）」の九語である。ほかに、「かつのこ（鰊鯑）」「たぢま（但馬）」「ぢよ（恕）」「ぢん（甚）」「ろぢ（盧次）」の五語もあるが、いずれも他文献での掲出例が少ない（但馬・恕）とか、表記に動揺（甚）がある、或いは、語源俗解による充て字（書言には鰊を「カド」とする）の可能性もあるということで、ここでは対象から外すこととする。

この九語は、いずれも「誤った仮名づかい」を「正しい」と誤認したものである。それでは『初心假名遣』の編者は、どのような理由でこのような誤解をしたのであろうか。もし仮に右の九語に位相的な共通性が存するのであれば、出典を厳しく吟味した契沖とは異なり、『初心假名遣』の編者が仮名づかいを誤ってしまうことは充分に予想できることである。しかし、証明しやすいという点で、右の九語のうち和語の五語に対象を絞っ

または、若枝を言う。本来の正しい語はスワイである。とある。「正しい形は（清音形の）スワイである」ということは、キリシタンの持つ規範意識ではこの「ズワイ」という語頭濁音形を、俗語と考えているのである。[註④]

『日葡辞書』の注記を参照してのことであるが、この二語を見ただけでも、

歌語　―　みくず（水屑）
俗語　―　づはえ（楛）

のように、位相面からの共通性はみられないのである。仮にこの五語が、いずれも古典だけに使われる雅語であったとすれば、非日常的な語彙であるために正しい仮名づかいがわからなかったという解釈ができて、他書との間に仮名づかいの異同の生じる理由も説明できるのである。あるいは、五語がともに俗語や方言であれば、その場合も独自に発音が変化した語（訛語）という点で、ある程度の説明が可能である。しかし、右の二語以外の「みずがき（瑞籬）」「うぢ（蛆）」「くぢ（鼈）」のいずれもが、普段の日常生活と密着した生活語彙であって、その考え方は可能性が薄い。このように考えると、これらの語彙を『初心假名遣』だけが当時の仮名遣書や辞書類と違った仮名づかいをしていることについての納得できる説明ができないことになる。

しかし、観点を変えて、語構成の面から分析すると、右の五語だけでなく、先の［図表］に挙げたいくつかの語も含めて、ある程度の共通する傾向を見つけることができるのである。その共通性とは、大半の語彙の語源が明確でなくて、各々が充てるべき正字（漢字）が固定していないということである。「うぢ（蛆）」「くぢ（鼈）[註⑤]」の二音節語をはじめとして、「づはえ（楛）」「みくず（水屑）」の三音節語のいずれもが、正字といわれるものを持っていない。或いは、画数が多い（鼈）ことから、漢字表記が避けられ、仮名で書くことが選択される傾向がみられる。このことは、四音節語の「みずがき（瑞籬）」も同様である。極端な言い方をすれば、「うぢ（蛆）」という語の仮名づかいは、「ウヂ」が正しいのか「ウジ」が正しいのかの判断の基準が存在しないということなのである。その典型的な例として、「げぢ〳〵（蚰蜒）」が挙げられる。この「げぢ〳〵」は、『和字正濫通妨抄』に「今云、けし〳〵は俗語（巻四）」と説くように明らかに俗語であって、充てるべき漢字を持っていない。大正四年刊の国語調査委員会編『疑問仮名遣』でも、「げじ／〳〵」の形を「疑問」として挙げているように、『初心假名遣』のいう「げぢ〳〵」が正しいのか「げじ〳〵」が正しいのかと

いう確かな証拠は存在しないのである。

また、「づはえ」の場合の「え」は、「枝」のことかと想像できるが、「づは」がどういう意味なのか。仮に『日葡辞書』にいう「すわ」であるとしても、それに該当する適当な漢字が存在しない以上は、仮名づかいを確定する根拠がないということになる。『假名字例』で「ずはえ　づはえ　トモ」とあるのは、語源（正字）がわからないため、併存形をとったものと思われる。併存形が挙げてあるという意味で、『倭字古今通例全書』には「みしかし　短　今案ニみちかし」という両形を挙げているが、或いは「みじかし（短）」の語源に「身近（ちか）し」が連想されたために表記の決定ができなかったのではないかとも考えられる。このように本来、正しいはずの仮名づかいを、『初心假名遣』で誤ったかたちに訂正してしまった右の五語には、充てるべき漢字が確定しないという共通性が考えられるのである。

漢語の（「じ（治）」「ぢん（甚）」「ぢんでう（晨朝）」「むじん（無尽）」「れうじ（療治）」「ろぢ（盧次）」）についても、基本的には和語の場合と同様の解釈ができる。例えば、「じ（治）」の場合、『初心假名遣』で「治　慈　同　じ」とするように、「治」と「慈」の両者は区別なく「じ」の仮名づかいとなっている。

元禄時代には既に「ジ」と「ヂ」の発音上の区別がなくなり、音声的には「ジ＝ヂ」となっている以上、「ジ」と「ヂ」の相違は、書き分けなければならないという規範（知識）でしかないのである。

その規範の「物差し」をどこに置くかによって、特に漢字音が日常生活と密着していない人たちにとっては、その判断が大幅に「ゆれ」ることになる。口頭言語ではないという意味で、「ぢんでう（晨朝）」「むじん（無尽）」「れうじ（療治）」などは、仮名表記されることがなく専ら漢字表記され、そのために仮名づかいを確認する方法がなく、表記の異同が生じたのではないかと考えるのである。

『初心假名遣』の四つ仮名表記の解釈

先に述べてきたように、四つ仮名の書き分けが一種の教養として存在していたことは、既に江戸時代初期の笑話集に、いくつかそれを題材にした説話が残っていることでも明らかである。次の二話は、いずれも安楽庵策伝が、元和元年〈一六二三〉に『醒睡笑』としてまとめ刊行したものである。

（ア）傍より申けるハ　お公家衆は鳥獣の名をこそつかせ給へ

「まつ　烏丸殿　鷲尾殿　鷹司殿　猪熊殿」といひければ
又たそはの者「またある」「たれそや」「万里のこうし殿の」
（内閣文庫本（影印）・巻二／括弧は引用者）

（イ）「昨日は一日妙圓寺といふ寺にあそひつるハ」と語る
「つゐにきかぬ寺や　妙ハ妙法の妙にてあらふす　ゑんハ」
「ぬれゑんしや」「いやとよ書やうハ」「蕨縄のまわしかき」
「こゝな人ハ　字の事をとふに」といへは「字はすな地じや」
と　（同・巻三）

（ア）と殆ど同じ内容の話が、寛永一三年板本の『きのふはけふの物語・巻下』にも載っているように、この笑話は当時広く流布していたようである。

もちろん、この笑いの性格は、仮名づかいが違っていること（「こうじ」（小牛）」と「こうぢ（小路）」の区別）をも知らない「無教養を笑った話」[註⑥]という解釈を否定することではないが、日常の生活の中で、文字（仮名）を書く習慣の殆どない階層の人にとっては、音声言語での同音異義語による意味の取り違えは、それほど珍しいことではなかったと思われる。それにも関わらず、仮名づかいを間違ったことも知らない無智を笑うこのような笑話が広く流布していたということは、この話は、

「発音が同じであっても、仮名に書く時には、さまざまな違い（仮名づかい）があり、その違いを知らなければ世間から「笑い」の対象とされてしまうから注意しよう」

という教訓譚をも兼ねていたのではないかと考えるのである。

（イ）の笑話は、やや教養のある聞き手（漢字を使える層）が、寺号に充てる文字（漢字）のことを質問しているのに対し、漢字と無縁の教養のない男は、その寺院の造作のことと思い込んで応答するという、無教養からくる勘違いを題材にした典型的な笑話のパターンである。この話は「じ（字）」と「ぢ（地）」とが同じ発音であることを前提にしなければ成立しないものであるが、（ア）の場合は「こうじ（小牛）」という和語が介在していたのに対し、（イ）はいずれも一音節の漢語であるため、当事者にとっては、語義の識別は（ア）よりはやや困難なものであったと考えられる。

ただ（ア）（イ）で仮名づかいの対象となっている「うじ（牛）」「じ（字）」「ぢ（地）」は、『初心假名遣』の四つ仮名関連の一二七語には入っていない語なのである。ごく日常的な語彙である「牛」「字」「地」が仮名遣書に標出されていないということは、このような語は、通常漢字で表記されることが多く、仮名表記されることは稀であったために、仮名づかいの対象とはなり難かったのではないかと考える。先に述べた「げぢ〳〵」を

始めとして、「うぢ（蛆）」「くぢ（鬮）」「みくず（水屑）」などが仮名表記を原則としているのとは、そこに大きな相違が存在する。

四つ仮名が発音の面だけでなく、表記の面でも二つ仮名化したことを証明するものとして、一七世紀の貞門俳諧で流行した回文があげられる。[註7] 慶安四年〈一六五一〉刊の『崑山集』には、

①咲かつハしらしやしらしはつか草（くさ）

（附録回文　牡丹の項・大坂住　一明）

②なかすはちしちもつもちし師走哉（しはすかな）

（附録回文　雑冬の項・備前　幾成）

などの回文俳句が載っている。①の「咲かづ…はつか草」は、回文としての仮名連鎖に矛盾はないが、「咲かづ（数）」の「数」は「かず」でなければならない。しかし、ここを「咲かず…」と書くと末句の「はつか草」と仮名が違うことになり、「（回文歌とは）逆さまに読むに同歌なり（奥儀抄）」という回文の法則に外れることになる。恐らくこの句の作者は、ちょうど平仮名文献で「は（字母「波」）」の仮名として異体仮名の「者・盤・八・半・葉（いずれも平仮名の字母を示す）」が使われるのと同じ発想で、「ず」と「づ」の仮名を使ったものであろうと考えられる。

②も、初句が「ながすはぢ」で末句は「しはすかな（師走哉）」とあり、「ち」と「し」の仮名が違うため厳密な意味では回文とはならないはずである。しかし、『崑山集』ではこの歌を「回文歌」に分類していることから、①と同様に「ぢ」と「じ」を異体仮名の一種として考えていたものとみられる。

このように、元禄期よりも半世紀近く古い時代に、発音だけでなく表記（仮名）面でも「じ＝ぢ」「ず＝づ」を同一視する土壌がすでに存在していたのである。

『初心假名遣』の四つ仮名関係の仮名づかいで、最も特徴的なのは、先の［図表］で「★」印を付した語彙（他の文献と異なる仮名表記をしたもの）である。そのうち、和語の「うぢ（蛆）」「くぢ（鬮）」「づはえ（楛）」「みくず（水屑）」「みずがき（瑞籬）」の場合は、いずれも仮名づかいを決定する根拠となる語源が明確ではないために、充てるべき漢字が固定していないという共通性が存在していたことについて述べた。また、漢語の場合は和語と違って、いずれの語彙も口頭語ではないという点で、仮名表記される機会が少なく、「仮名づかいの洗礼」を受けることがなかったという解釈ができる。言い換えると、和語については、仮名づかいを決定する根拠となるはずの身近でわかりやすい漢字が存在しないこと、漢語については、仮名で

書く習慣の少ない語彙であるという点で、『初心假名遣』の四つ仮名に関する違例仮名づかいの解釈ができるのである。

まとめ

『初心假名遣』の部門分類が当時の代表的な節用集よりも詳細であり、その部門ごとに、内容に関しての短い梗概的な説明が加えられていることから、[註⑧]『初心假名遣』の読者層は、節用集の利用にあまり慣れていない人を対象としていると推測される。それが「初心」という書名に反映しているのであり、また、誤りやすい仮名を示し、ついで正しい仮名づかいと漢字を示すという記述形式になったのである。このことが、当時の仮名遣書の記述形式が、すべて「漢字―正しい仮名づかい（『和字正濫鈔』など）」「正しい仮名づかい―漢字（『蜆縮涼鼓集』など）」という記述形式を採っているのとは、根本的に違うところである。『初心假名遣』の記述形式では、仮名づかいを誤って記憶している人にとっては、正しい仮名づかいがすぐ下に示されているという点で便利であるが、逆に正しい仮名づかいを知っている人が、念のために確認する目的で利用しようとしても、仮名遣書として殆ど機能しない場合もあるという欠点がある。

特に、四つ仮名関係の漢語に多い「じかい　ぢかい出家　持戒」「ずつう　づつう　頭痛」などのように語頭音節の仮名が違う場合、「誤りやすい仮名づかい」を知っていなければ、「持戒」「頭痛」の「正しい仮名づかい」は検索できないという欠点を持つことになるのである。ごく一部の俗語的語彙（ずはえ・げじげじなど）を除いて、和語には語頭濁音語が存在しないため、このような問題が生じるのは漢語に限られることになり、そのことから、『初心假名遣』の読者層には、漢語を多用する当時の知識階級は初めから対象にしていなかったのではないかと考えられる。

元禄時代には、多くの仮名遣書が出版されると同時に、代表的な作法書（教訓書）である『女重宝記』『男重宝記』（ともに苗村丈伯著）や往来物も出版された。『初心假名遣』の板元（京寺町五条橋誥上ル町　山岡市兵衛）からは、作法書の『しのすすき　女筆』が出版されているが、本書の狙った読者層は、それとほぼ共通するものではないかと思われる。『初心假名遣』には、著者（編者）名が明記されていない。この時代の実用の教養書で、著者名が記されていないものの代表に往来物があるが、出版の書肆の側からは、本書はそのような分類だったのではないかと考えられる。

本書はひとことでいえば、基礎教養書をイメージした、初心者向きの仮名遣書である。そうではあっても、実用性が殆ど感じられないような難解な漢語をいくつか鏤めることによって、使用する読者の自尊心をも満足させる効果を持っていたのではないだろうかと考える。

発音上の区別を失って同音化した音を、別の違った仮名で書き分けるための規範が仮名づかいである。その「仮名づかい」を知っていることが、仮名で文章を書く上での必修の教養であった。『初心假名遣』は、その意味で、元禄文化を背景に成立した「初心者向きの仮名遣書」として位置づけられるのである。

【註】

①遠藤邦基「四つ仮名の読癖―「鼻ニ入ル」の注記の意味―」（『國文學』八二号／二〇〇一）

②土井忠生他訳『邦訳日葡辞書』解題（岩波書店／一九八〇）

③片桐洋一「日葡辞書の歌語―その性格と時代性―」（『国語語彙史の研究・第四集』和泉書院／一九八三）

④遠藤邦基「濁音減価意識―語頭の清濁を異にする二重語を対象に―」（『國語國文』四六巻四号／一九七七）

⑤『蜆縮涼鼓集』には、「圖…一云くぢ未考」「御圖…一本みくぢ」とあり、また「うぢ蛆…一云ウジ未考」のように仮名づかいに「ゆれ」がみられる

⑥鈴木棠三校注『醒睡笑』（角川文庫／一九六〇）

⑦註①に同じ

⑧例えば、天地門には「天地ノ間ノ事　雨雪山川ノ類在（アリ）」の如く、簡単な説明が加えられている

【参考文献・影印】

『天治本新撰字鏡　増訂版』（臨川書店／一九七三）
『類聚名義抄　全二巻』（風間書房／一九八六）
『邦訳日葡辞書』土井忠生他訳（岩波書店／一九八〇）
『合類節用集　研究並びに索引』（勉誠社／一九七九）
『書言字考節用集　研究並びに索引』（風間書房／一九七三）
『倭字古今通例全書　上下』（勉誠社文庫一一八／一九八三）
『国語学研究事典』佐藤喜代治編（明治書院／一九七七）
『近世書林板元總覧』（青裳堂書店／一九八一）
『國語學書目解題』赤堀又次郎著（吉川半七発行／一九〇二）
『ロドリゲス日本大文典』土井忠生訳註（三省堂／一九五五）
『醒睡笑』（近世文芸資料／古典文庫／一九六四）
『きのふはけふの物語研究及び総索引』（笠間書院／一九七三）

『國語學大系9』福井久蔵撰輯（白帝社／一九六五）
『駒沢大学国語研究　資料第一・三』（汲古書院／一九八一ほか）
『契沖全集第十巻』（岩波書店／一九七三）
『近世文学資料類従』（勉誠社／一九七七ほか）
『日本語の歴史5』（平凡社／一九七〇）
『假名遣研究史』木枝増一著（贊精社／一九三三）
『国語表現と音韻現象』遠藤邦基著（新典社／一九八九）
『読み癖注記の国語史研究』遠藤邦基著（清文堂出版／二〇〇二）
『仮名表記論攷』今野真二著（清文堂出版／二〇〇一）
『仮名文書の国語学的研究』辛島美絵著（清文堂出版／二〇〇三）

【後記】

本論は、平成一七年度提出の本学大学院博士前期課程の修士論文の一部である。その際、資料編として提出した『初心假名遣』語彙索引は、『国語文字史の研究』一〇（和泉書院・近刊）に掲載予定である。

（かの　りつこ／本学大学院生）